

〔原 著〕

思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験 —ダブルケア当事者の語りを通して—

佐藤 美樹¹⁾ 中山美由紀²⁾ 井上 敦子²⁾

要 旨

目的：思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをした家族の体験を明らかにする

方法：思春期の子育てと同時期に老親介護を行った経験をもつ者3名に、半構成的面接を実施。面接内容を逐語録にし、質的帰納的に分析した。

結果：思春期の子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験から9カテゴリーが抽出され、ネガティブな側面とポジティブな側面が生じていた。ネガティブな側面には、【家族それぞれが思いを抱え悩む】、【家族の日常生活を維持することが困難となる】、【子どもが自身の思いを抱え込んだり反抗心を抱く】、【子どもの学校生活や進学が妨げられる】の4カテゴリーが抽出された。ポジティブな側面では、【互いに支え合い介護と日常生活を維持できるよう行動する】、【医療者や周りの人からの支援を受け安心感を抱く】、【子どもが自身の世界を広げていく】、【介護する経験を通して家族が成長する】という4カテゴリーが抽出された。

結論：思春期の子育てと老親介護のダブルケアをする家族に対する家族看護として、家族全体を支援の対象と捉え、子どもの年齢や進路など家族の状況に応じて多様な角度から潜在する問題を捉え、支援の方向性を検討することの重要性が示唆された。

キーワード：ダブルケア、思春期、家族の体験

1. 緒 言

介護を必要とする高齢者の増加に伴い、家族の介護疲れ・介護負担などが要因となる様々な社会問題が浮かび上がり（浅野，2020）、新たな社会的リスクの一つとして育児と介護を同時進行させるダブルケアが注目されている（澤田，伊東，2018）。晩婚化・晩産化による子育て期に入る年齢の上昇と、高齢化による要介護高齢者の増加が同時に進展する中で、ダブルケアを経験する者の割合はさらに増加することが推測されている（澤田，2020）。さらに少子化による介護者の兄弟数減少や地域関係の希薄化

により、介護者の代わりに介護や子育てをしてくれる人が少なくなり、育児や介護環境の厳しさがある（相馬，山下，2017）。

子育ては子どもの年齢により手のかかり方が違うため、介護が家族の発達段階のどこに降りかかってくるかにより、ダブルケアの意味合いが大きく異なってくる。先行研究では、ダブルケアの子育ての研究対象要件を未就学児とするもの（船渡，山口，2021；浅野，2020；増谷，木村，2021）や、未成年者全体に焦点を当てたもの（堀川，赤井，2019；澤田，伊東，2018）があり、介護知識の不足、子育て協力者の不在、精神的支援者の不在など介護者を取りまく困難な状況や金銭的負担が明らかにされているが、思春期の子どもの子育てと老親介護の実態については十分に明らかとなっていない。

1) 大阪府済生会中津病院

2) 大阪公立大学看護学研究科

乳幼児の子育てには物理的に手がかかるものの、思春期以降は精神的なケアの比重が高まる（相馬，山下，2020）。特に思春期は若者が子どもから大人への移行を経験して若者としての成熟を予期する中で、両親との親密さと隔たりや依存と自立の間で揺れ動く期間である（McDaniel, Campbell, Hepworth, et al., 2012）。この時期の子どもは不安定な心理状態にあり、家族は子どもが抱く自立と依存の葛藤や自立への不安を理解し、積極的に関心を示し見守り続けることが大切である（小野田，吉岡，2017）。また思春期の子どもをもつ家族は、親自身も中年世代となり身体的変化が起こる人生の節目であり、この時期の家族は心の揺らぎを抱える家族員で構成される移行期の家族と言える。移行期は家族が新しい発達課題に取り組む時期であり、適切に取り組むことができない場合、家族は危機的状況に陥りやすい（Meleis, 2019）とされる。そこで本研究では思春期の子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験を明らかにし、ダブルケアをする家族を支援するために必要な看護の示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は質的記述的研究である。質的記述的研究は研究領域が比較的新しいあるいは研究しようとしている現象についてほとんどわかっていないときに実施され、研究対象となっている現象を記述することにより、その現象を理解することが第一の目的である（グレッグ，麻原，横山，2016）。思春期の子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験を記述することは、家族に生じた現象を理解するために適した手法であると考え、この手法を用いた。

2. 用語の操作的定義

思春期とは自分自身と向き合いアイデンティティを確立する時期であり、学童期に続く発達段階である。本研究では思春期を中学1年生から高校3年生までと定義する。

3. 研究参加者

研究参加者は、子どもが思春期の時期に主介護者として介護と子育てを同時に行った経験を持ち、ダブルケア経験を想起しながら語ることができる者とした。被介護者は実父母または義父母とし、被介護者の介護度、子どもの数、出生順位は限定しないこととした。

4. 研究参加者の選定方法

ダブルケア支援団体・医療介護施設を通じ、研究対象の条件に適合するダブルケア経験者の紹介を依頼。紹介されたダブルケア経験者に対して、研究協力依頼書を用いて研究の趣旨と方法を口頭で説明し、研究参加の同意が得られた場合に研究参加者として選定した。

5. データ収集期間

2022年9月～10月

6. データ収集方法

本研究および面接に同意が得られた研究参加者に対して、個人特性に関する情報収集用紙を用いた調査と、インタビューガイドに沿った面接を行った。社会情勢および研究参加者の生活に支障が出ないよう、研究参加者の希望により対面またはオンラインを活用したりリモート面接を、研究参加者の希望する日時、場所で行った。体験を語るには長時間を要することが予測されるため、研究参加者の負担を考慮して1回40分程度の面接を、2回に分けて実施した。面接内容は研究参加者の承諾を得てICレコーダーに録音した。面接中は可能な限り発言を控えて聴くことに専念し、研究参加者の自然な語りの中から家族の体験を聴くことに努めた。一方で研究参加者の発言の確認のために、研究参加者の語りを要約する、研究参加者の言葉を繰り返すなどの方法を用いた。

7. 調査内容

研究参加者家族の個人特性と、家族の体験に対する具体的な内容について尋ねた。1回目の面接では、「思春期の子どもの子育てと介護をどのように行い、どう受け止めていたか」、「介護するなかで、

家族はどのような行動をし、家族のなかで起こった変化や印象に残るエピソード」について質問後、研究参加者の自然な語りに沿って、具体的な状況や内容について質問した。2回目の面接では、研究参加者に1回目の面接に対する補足の有無について質問後、研究参加者の自由な語りの流れに沿い体験の詳細について質問した。

8. 分析方法

面接内容について研究参加者ごとに個別分析し、その後全体分析の2段階で行った。個別分析は、研究参加者ごとに面接の逐語録を作成後、内容を繰り返し精読し、できる限り研究参加者の語りの文脈を尊重しながら家族の体験を表現している記述を抽出した。抽出した文章を精読し、意味内容が明確になるよう1つの文章で表現した簡潔な一文をコードとした。全体分析は、研究参加者ごとに導き出したコードの類似性から共通する意味内容を一文で表現しサブカテゴリーとした。次にサブカテゴリーの類似性によって分類し、共通する意味内容を一文で表現しカテゴリーとした。カテゴリーとサブカテゴリーの分析過程では、家族看護学を専攻する複数の研究者と各段階での確認を繰り返し、真実性と妥当性の確保に努めた。

9. 倫理的配慮

本研究は、大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した（承認番号：2022-204）。研究協力者には、研究の目的と意義、プライバシーの保護、自由意思による参加、辞退の権利、研究参加における同意撤回の自由とそれ

らによる不利益を生じないこと、研究に関する質問にはいつでも答えること、録音の諾否、研究結果の公表予定、研究結果の還元、研究資料の保管および廃棄の方法、研究参加者個人のデータ公開とデータ修正・削除等について文書と口頭にて説明を行った後、同意を得た上で面接を実施した。面接はプライバシーが保持できる、研究参加者が希望する場所もしくはオンラインで実施した。

III. 結 果

1. 研究参加者の概要

研究参加者とその家族の概要を表1に示した。研究参加者は40～50歳代の男女3名、面接回数は2回で、1回あたりの面接所要時間は平均38分57秒（±6分16秒）であった。

2. 思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験

面接の逐語録を分析した結果、思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験として、8カテゴリー、43サブカテゴリー、162コードが抽出された（表2）。以下に各カテゴリーに沿って述べる。なお、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは[]、研究参加者の語りは「 」で示し、意味内容が分かりにくいところは（ ）で言葉を補った。家族の続柄を表す各単語については、「老親」は被介護者について、「親」はダブルケア当事者について、「子ども」はダブルケア当事者の子どもを示すこととする。

表1. 研究参加者とその家族の概要

参加者	介護開始時の参加者の年齢	被介護者の続柄・介護開始時の年齢	被介護者の疾患	被介護者との同居・別居	ダブルケア中の家族構成	介護期間に中高生であった子	介護期間	介護サービス利用の有無	参加者の就労
A	50代	義父 70代	脳梗塞	同居	夫（単身赴任）、第1子（男）、第2子（女）	第1子、第2子	10年	有	正規
B	50代	実父 70代	がん	別居 （介護の為に被介護者が近隣へ転居）	妻、第1子（女）、第2子（男）、第3子（男）第4子（女）	第3子、第4子	2年6か月	有	正規
C	40代	実母 60代	がん	同居（介護の為）	夫、第1子（女）、第2子（男）、第3子（女）第4子（女）	第1子、第2子	1年6か月	無	パート

表2. 思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験のカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
互いに支え合い介護と日常生活を維持できるよう行動する	・家族それぞれが、家族だからこそ祖父母を助けてあげなければという思いを抱く ・なぜ家族に介護が必要な状況であるのかを、子ども達にも分かるように説明をする ・子ども達は生活の中で進んで祖父母への配慮をしたり、介護を支える ・家族のこれまでの日常生活を維持しつつ介護するため、家族内で役割を分担しなおす ・家族の日常生活の維持と介護を両立させるため、段取りを考え行動する ・介護する家族の負担を軽減できるように祖父母を呼び寄せる ・介護される祖父母や、子ども達それぞれの思いや立場を尊重して接する ・子育てと介護を両立させ、家族の日常生活を維持するため、日々奔走する ・介護を担う主介護者を夫や妻が支える ・介護に奔走する母親の体調を子どもが心配する
家族それぞれが思いを抱え悩む	・親のことを看たい思いと、子どもにも手をかけてあげたい思いの間で悩む ・子どもは変化する祖父母の病状や先のみえない状況を受け止めることに葛藤を抱く ・子どもが介護の手伝いをするを、いつの間にか当然とってしまう ・子どもは祖父の言動を認知症の症状だと理解できずとまどう ・家族で介護する中で、介護する側もされる側も抵抗感や難しさを感じる
家族の日常生活を維持することが困難となる	・介護や子育て、仕事など日々やることが積み重なり、精神的にも時間的にも余裕がなくなっていく ・精神的にも時間的にも余裕がなくなり、子どものことにまで気が回らなくなっていく ・家族のバランスが崩れ、役割を果たせず、家族として機能しない ・ダブルケアをする中で子育てと介護の調整の難しさを感じる ・家族の日常生活で起こる出来事に合わせて介護サービスを利用することが難しい ・介護が要因となり、子どもの学校行事参加に支障をきたす ・疲労から体調不良が起り、他の家族も体調が不安定になる
子どもが自身の思いを抱え込んだり反抗心を抱く	・子どもは介護を優先する親を見て、自身は心配されていないと反発する ・子どもは介護に親を奪われていると感じ、祖父への反発心を抱く ・子どもは、学校から帰っても、家の中で居場所のなさや気を休めることが出来ないと感じる ・子どもは親や祖父母の言葉を素直に受け止められず、無視したり、いら立ち反抗する ・子どもは介護に手一杯な親の状況に遠慮し、思いを抱え込んだりしんどさを感じる
子どもの学校生活や進学が妨げられる	・子どもは親の様子から進学について相談ができず、進学を諦める ・子どもの世話にまで気が回らず、不登校やいじめなど、子どもの学校生活に影響が生じる ・介護により、子どもの交友関係や学校生活、習い事が制約される
医療者や周りの人からの支援を受け安心感を抱く	・職場の理解や支援があることで、子育てと介護を継続できる ・子育てを同級生の親や周りの人達が支えてくれることで、介護と両立できる ・介護や子育てに対し相談できる場があることに助けられる ・医療者から子どもへの支援に助けられる ・フォーマルなサービスを活用し、生活を整える ・医療者が介護をサポートしてくれることに、心強さや安心を感じる
子どもが自身の世界を広げていく	・子どもは親に相談できる状況ではないと感じ、周りの知人やSNSを通じて出会う人々に支援を求める ・子どもは成長とともに手がからなくなり自立していく ・子どもは成長とともに自分自身の世界が広がり、自らの人間関係や交友関係を優先するようになる
介護する経験を通して家族が成長する	・介護を通して、子どもは要介護者の変化や現状を受け入れ、成長していく ・家族を介護した経験が、家族の考え方や進路に影響を与える ・介護経験が、家族にとって良い影響となるよう行動する ・介護を通して、その後の自分達家族のあり方に気づく

1) 【互いに支え合い介護と日常生活を維持できるよう行動する】

このカテゴリーは、家族がこれまでの家族役割を分担しなおし、互いを支え合いながら介護と日常生活を維持できるように取り組んでいることを示している。このカテゴリーに象徴的な語りを以下に示す。

「介護で祖父が片麻痺になった時には、家族ができ

ることは助けてあげなきゃいけないっていうので。」
「私が留守の間に（子どもに）お願いねっていう時は、（子どもが）ちゃんと（祖父を）見といてくれたりとか。おかずを作っておくと、（祖父の為に）電子レンジで温めといたとってってくれるんですけど。おじいちゃん片麻痺で、器とか持って歩けないんで。そういうことは、ちゃんと（子どもが）してくれるんです。」

2) 【家族それぞれが思いを抱え悩む】

このカテゴリーは、介護する日々の中で、家族それぞれが思いを抱え悩むことを示している。このカテゴリーに象徴的な語りを以下に示す。

「母を見るっていう決断は先にしちゃってたんだけれども、その後に子どもへの影響っていう風なところは、すごい後ろにいつも引かれるような思いで。子ども達が学校の生活とかで忙しかったり、いろいろあるなかで、やっぱり何かしらの影響は（子どもに）あるだろうってことも推測は出来たので。」

3) 【家族の日常生活を維持することが困難となる】

このカテゴリーは、親が精神的にも時間的にも余裕がなくなり体調を崩したり、介護のために子どもの学校行事参加に支障をきたすなど、家族の日常生活を維持することが困難となることを示している。このカテゴリーに象徴的な語りを以下に示す。

「介護認定であったり、病院とのやりとりであったりっていうのは、結局平日の昼間に、私も仕事の合間にやりとりをしている中で、どんどん時間的な余裕もなくなっていく。」

「やっぱり生活自体が、介護者がいることによって子育てしながらでも、やっぱりそこ（介護）にバロメーターが合わしてって、生活リズムが成り立っていくってことがあるので。そこのところがやっぱり大変かな。」

4) 【子どもが自身の思いを抱え込んだり反抗心を抱く】

このカテゴリーは、子どもが介護に親を奪われていると感じ、要介護者に対する反発心や介護を優先する親に対する反抗心を抱くことや、介護に手一杯な親の状況に子どもが遠慮し思いを抱え込むことが示された。このカテゴリーに象徴的な語りを以下に示す。

「『僕の場合は気にかけてくれたか?』みたいなアピールはありますよね。例えばストーマの関係でちょっと汚れちゃったので、シャワーをおじいちゃん入れざるを得ないときに、お弁当ができてなかったりしてて。後から持っていくっていうと、『後から持っていくぐらいやったら途中で買うわー!』みたいな。『なんで間に合うように作っとかへんねん。』みたいなこともあるし。『僕の弁当いるの、わかってるやろ。いいよ、途中で買っていくわー!』みたいな、こう投げやりな。」

「彼女の的には『やっぱりしんどかった。』って言っていました。長女は高1から高2の10月までかな、だからもう受験がこれからってとこと、部活も忙しかったりっていうところで、『家で休めなかった。気を休める時間がなかった。』っていう話をしていたりとか。」

5) 【子どもの学校生活や進学が妨げられる】

このカテゴリーは、家族が介護を担うことにより子どもの交友関係や進学に影響が生じることを示している。このカテゴリーに象徴的な語りを以下に示す。

「（子どもが進学について）とても言えるような状態ではなかったっていう。それはそうだと思いますね。私もいつもいらいらしてましたし。」

「女の子にしては致命的な。洗濯してないとか昨日と同じ服着てるとか、みんなから言われて、いじめられていたみたいな。『くさい。』とか。その時は、ニキビとかも出てきて。普通のご家庭だと皮膚科連れて行って治療してっていうのが、ケアしてってみんなしてると思うんですけど。それも出来なくて。それをまた言われて、みたいな。」

6) 【医療者や周りの人からの支援を受け安心感を抱く】

このカテゴリーは、ダブルダブルケアをする親が周りの人達からの支援や、医療者からの支援を受け安心感を抱くことで、介護と子育てを両立できることを示している。このカテゴリーに象徴的な語りを

以下に示す。

「職場の人の優しい言葉かけだったり、『大丈夫だよ、お休みする時は休んでいいよ。』っていう言葉だったりとか。私がしんどくない、ちょっとでも私の力になろうとサポートしてくれるって優しさだったりに救われて歩めたかなって思います。」
「役員とかって話が結構ね、二人目だったのでねって話が。その時はすごく恵まれていて、『今介護大変だから外してあげようよ。』って言うて下さる方もいてたんで。」

7) 【子どもが自身の世界を広げていく】

このカテゴリーは、子どもが介護をきっかけに自立したり、知人やSNSを通じて出会う人々に支援を求めるなど、子ども自身の世界をさらに広げていくことを示している。

「中2ぐらいやったんですけどね。『自分でする、ママいいよ僕する。』って、かなり自立してくれて。お勉強とかすごい苦手で、一緒にしていたんだけど、おばあちゃんのそういうことがわかって、『お母さんここまでしてくれたらできるから。』って言って。けっこう自立するのは早かったかな。自分がそういう状況っていうのをちゃんと理解できて。」

「部活とか学校とか、学年が上がるにつれて、帰ってくるのが遅くなったりするとかで。ほんとに食事の場面とか。まあ男の子、そうなんかもしれませんけど、ほんとに大きくなったら食べることと洗濯のこと、身の回りのことぐらいしか、もう親の役割がなくなってきた。彼にとったら、もうなんかこう楽しいことが他にみつかったみたいな。青春時代のね。その楽しいことが外ではみついているんやなと、見てたんですけど。」

8) 【介護する経験を通して家族が成長する】

このカテゴリーは、介護を通してその後の家族の

あり方に気づいたり、介護する経験を通して家族が成長することを示している。このカテゴリーに象徴的な語りを以下に示す。

「あの経験が、子ども達が周りを見る機会だったり、周りと調和しながら自分がどう動くべきかっていうところを考えながら歩む期間になっていたんだなって、すごい、今振り返るとすごい思います。」

「息子的には『自分が医療職の道に行くのに、深くは影響しているとは思わないけれど、医療職っていうくくりでは、おばあちゃんとの経験は活かされて、つながっている気はするし。今思うと、やっぱり今の自分を作っているのは過去のことから、今後に役立つんじゃないかなって。』(息子が) 言ってみたりとか。」

IV. 考 察

本研究の結果から、思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験には、ネガティブな側面と、ポジティブな側面が生じていることが明らかとなった。以下に、各側面から家族の体験を考察する。

1. 思春期の子育てと老親介護のダブルケアによって家族に生じるネガティブな側面

ダブルケアにより家族に生じるネガティブな側面には、【家族それぞれが思いを抱え悩む】、【家族の日常生活を維持することが困難となる】、【子どもが自身の思いを抱え込んだり反抗心を抱く】、【子どもの学校生活や進学が妨げられる】ことを認めた。

思春期の子育ての特徴として、乳幼児期の物理的な育児とは異なり、精神面や学習面での支援へと変化していくことが挙げられる。相馬、山下 (2020) は、思春期以降は精神的なケアの比重が高まると述べており、中高生の子どもは成長とともに自立し、親からの支援を必要とすることが少なくなっていく。そのためダブルケア当事者は、時間の余裕がな

くなり、介護と子育ての選択を迫られた際、子どもへの精神的なケアよりも介護を優先せざるを得ない状況になっていくと考えられる。本研究結果では、ダブルケア当事者である親が介護を優先し、子どものことにまで気が回らなくなるにより、【家族の日常生活を維持することが困難となる】ことを引き起こしていた。その要因の1つに、ダブルケアをする中での子育てと介護の調整の難しさがあげられる。介護サービスは柔軟性の低さなど、突発的な出来事が起こった際の急な利用や変更が難しく、ダブルケアであるが故のサービス提供体制上の問題点(澤田, 伊東, 2018)を持ち合わせている。家族の日常生活を維持するため介護サービス利用をしても、家族の日常で起こるイベントや突発的な出来事に合わせて介護サービスを調整することが難しく、家族が介護サービスの予定に合わせた生活リズムを作らなくてはならない。また中高生は、放課後の課外活動、塾や習い事の送迎など、夜間にも親のサポートを必要とする活動が増えていく。しかし介護サービスの提供は日中が主となっており、家族の多様な生活リズムに合わせて利用することが難しい状況がある。結果、夜間帯の子どもへの支援と介護のダブルケアが、介護者の時間的な余裕のなさにつながっていくと考えられる。

ダブルケア当事者である親が、精神的にも時間的にも余裕がなくなることにより、思春期の子どもにもさまざまな影響が生じている。親が余裕のない日々の中で介護を優先せざるを得ない状況になることは、【子どもが自身の思いを抱え込んだり反抗心を抱く】ことを引き起こしている。思春期の子どもは、両親との親密さと隔たりや依存と自立の間で揺れ動く期間(McDaniel, et al., 2012)であり、親から干渉されたくない思いを抱きながらも、同時に親に甘えたい依存心との間で揺れている。石川(2008)は、思春期の子は自我が急速に豊かに伸びるため言語が追いつけていない状態になり、自己表現が上手くできない発達段階にあると述べている。不安定な心理状態にある思春期(小野田, 吉岡,

2017)の子どもは、親に甘えたい依存の要求と介護で余裕のない親の状況との間で葛藤を抱きつつ、自身は心配されていないと捉えるに至る。結果自身の思いを上手く表現できない思春期ならではの特性として、自身の思いを抱え込んだり、親への反抗心を抱くと考えられる。同時に、子どもが抱く反抗心は親が介護に奔走する要因である介護自体にも向けられていた。子どもは自身に向けられるはずであった親の関心を介護に奪われていると捉えることで、時に思春期ならではの反発心と結びつき、要介護者である祖父母に対して反動的な態度をとるに至ったと考えられる。また[子どもは、学校から帰っても、家の中で居場所のなさや、気を休めることが出来ないと感じる]など、家の中での居心地の悪さやリラックスができないことを認識していた。小野田, 吉岡(2017)は、中学生の子どもにとって、親からの関わりや、家族から積極的に関心を向けてもらえることが家庭における居場所感につながると述べている。また中山, 藤内, 北山(1997)は、日頃から子供とコミュニケーションを図り、子供が親から安心感を感じとれるような親子関係を築いておくことが、子供の心身の健康にとって大切になると述べている。思春期の子どもにとって、日頃の会話を通して親から関心を向けられていると認識できることは、家庭での居場所感や精神的健康にも影響を与えるとともに、その後の親子関係や家族関係にとっても重要になると考えられる。

親が介護により子どものことを気にかける余裕がなくなることは、【子どもの学校生活や進学が妨げられる】ことも引き起こす。思春期である中高生の子どもがいる教育期後期の家族には、子どもの受験など進路の決定や将来の職業の選択などについて助言する役割(鈴木, 渡辺, 佐藤, 2019)があり、思春期以降は精神的なケアの比重が高まるとともに、進学についてのサポートが必要となっていく。しかし介護に奔走している親の様子から、[子どもは親の様子から進学について相談ができず、進学を諦める]ことが示された。親が介護で手一杯となること

は、子どものことにまで気が回らず、進学をサポートについて考える余裕がなくなっていくと同時に、子どもは親の大変な状況を慮り、自分の進学について相談できず思いを抱えこむことにつながると言える。さらに親が介護で余裕がなくなることで、子どもの世話にまで気が回らず、不登校やいじめといった学校生活での問題を引き起こしてしまう。子どもにとって家族機能はいじめや学校適応のみならず、その後の子どもの成長過程にも影響を与える(増田, 山中, 武井, 他, 2004) ことから、親が介護に奔走し、子どものことにまで気が回らない状況となることは、子どもの学校生活や進学に様々な影響を及ぼすと考えられる。

思春期の子育てと介護のダブルケアは、【家族それぞれが思いを抱え悩む】ことも引き起こす。ダブルケア当事者である親は、先の見通しが立たないことによる負担感(浅野, 2020)を抱き、老親のことを看たい思いと、子どもにも手をかけてあげたい思いの間で葛藤していた。同様に子どもも、祖父母を介護する状況がどのくらい続くのかわからず負担感を感じたり、衰弱していく祖父母の姿を受け入れることができず葛藤を抱えていることが新たに明らかとなった。中高生の子どもは成長とともに状況認識能力が発達していくため、親が介護に奔走する状態がいつまで続くのか予測できないことを認識できるようになる。そのため子どもは今後の状況がどうなっていくのか先の見通しがたたないことに対する不安を抱き、老いや疾患により衰弱し変化していく祖父母の姿に戸惑いを感じたり、変化を受け入れることに対する葛藤を抱くと考えられる。

ダブルケアにより生じるネガティブな側面は、ダブルケア当事者である親が介護と子育ての調整が難しくなり、精神的・時間的にも余裕がなくなることによって引き起こされている。鈴木, 他(2019)は、家族一員の変化は家族全体の変化を引き起こすと述べている。主介護者である親が余裕がなくなることにより、子どもの学校生活への影響を及ぼしたり、精神面への影響となって現れるなど、家族全体にネ

ガティブな側面を引き起こしていたと考えられる。相馬, 山下(2017)は、ダブルケアでは子どもに何らかのしわ寄せを認めた時に、ダブルケアを行う人の負担感やストレスがピークになると述べている。看護者は家族が子育てと介護の調整を図ることができているのか、子どもの生活に支障をきたしているのかといった視点を持ち、家族をアセスメントすることが重要である。

2. 思春期の子育てと老親介護のダブルケアによって家族に生じるポジティブな側面

ポジティブ側面には、【互いに支え合い介護と日常生活を維持できるよう行動する】、【医療者や周りの人からの支援を受け安心感を抱く】、【子どもが自身の世界を広げていく】、【介護する経験を通して家族が成長する】を認めた。

思春期の子どもの子育てと介護のダブルケアをする家族は、【互いに支え合い介護と日常生活を維持できるよう行動する】ことで、家族の日常生活の維持と介護の両立を図ろうとしていた。家族は要介護者への感謝や様々な思いから、家族だからこそ助けてあげなければという思いを抱くことで、介護を家族みんなで支えていこうとしていた。介護者の介護に対する思いを支える背景には、嫁や子としての社会的規範だけでなく以前に受けた恩恵や親への思い(堀川, 赤井, 2019)がある。本研究結果においても、これまでの家族背景から、家族だからこそ要介護者を助けていこうという思いに至ったと考えられる。さらになぜ家族に介護が必要な状況であるのかを子ども達にも分かるように説明することで、子ども達は要介護者の病状や予後、家族の状況を理解することができ、生活の中で進んで祖父母への配慮をしたり介護を支えるに至ったと考えられる。家族は生活の中で自然と要介護者を支えていこうと捉えるとともに、介護者に対する気づかいをし、体調を気にかけ、進んで介護を手伝っている。協力家族との良好な関係はダブルケア両立を可能にし、介護者の休息時間の確保にも影響(堀川, 赤井, 2019)することからも、家族が互いを思い合い支え合うことで、

家族の日常生活と介護を維持できると考えられる。

ダブルケアをする家族は、【医療者や周りの人からの支援を受け安心感を抱く】。浅野（2020）は、ダブルケアをする介護者にとって、周囲の理解が得られないことによる精神的負担とともに、フォーマルな支援体制とインフォーマルを含めた周囲のサポートの必要性を指摘している。本研究においても、職場の理解や支援、子どもの同級生の親や周りの人達の支援がダブルケアを継続できる要因となり、家族の日常生活を支えることにつながったと言える。ダブルケアでは、ダブルケアという共通の困難さを抱える人同士が話をしたり、支え合ったりする場が求められており（浅野，2020）、ダブルケアならではの困りごとや抱く思いを分かち合える場につながる事で、介護者がダブルケアへの思いを吐き出すことができ、介護と日常生活の両立ができると考えられる。さらに家族は、医療者から子どもへの支援に助けられることを語っている。思春期の子育てとのダブルケアをする親にとって、最も気がかりなことはダブルケアが子どもの成長に悪影響を及ぼすこと（船渡，山口，2021）であることから、親が子どものことを気にかける余裕がない中で、医療者が子どもへの気づかいや配慮を見せることは、親の負担感を軽減し、支えられている安心感につながり、ダブルケアを肯定的に捉える後押しとなると考えられる。

子どもは成長とともに自身の人間関係や交友関係を重視するようになり、【子どもが自身の世界を広げていく】ことでさらに自立していく。介護に奔走している親に相談できない状況でも、子どもは思いを抱え込むだけではなく新たに相談できる場所を求めて行動している。本研究でも子どもがSNSを通じて出会う友人や知人など家族以外の人に支援を求めることが示されている。平成29年版情報通信白書（総務省，2017）によれば10代の子どもたちでSNSを利用している者は8割にのぼっている。中高生の子どもが友人と交流する主な手段はSNSになり、簡単にネット上での出会いの場につながる事が

可能となるとともに子どもの問題行動の引き金ともなりうるリスクやトラブルに巻き込まれる可能性も潜んでいる。介護に奔走する親は時間的な余裕がなく親子間でのコミュニケーションが希薄となっていく中で、子ども達がSNSを通じて新たなコミュニケーションの場を家庭外に求めていくことは子どもの成長にもつながると考えられるため、子どもがSNSを安全に活用し世界を広げる効果的なツールとして活用できるように支援することも重要だと言える。

さらに中高生の子育てと介護のダブルケアをする家族は【介護する経験を通して家族が成長する】と捉えていた。ダブルケアを担う家族の体験の特徴としてダブルケアを行ったことで家族の絆が強くなり、家族としての成長が促進される（船渡，山口，2021）ことが報告されており先行研究と一致する結果であった。ダブルケアをする親は介護実践が子どもの介護に関する学習機会につながってほしいという希望（古田，興水，流石，2013）を抱いている。中学生の抱く高齢者のイメージから高齢者に関する正しい教育の必要性（平川，赤木，岩岡，他，2009）も指摘されており、子どもにとっても親と祖父母との関係性や、祖父母世代の生き方にふれたり、自身が介護に関わることには意味があると言える。本研究結果からも祖父母の病気や老いを間近で感じながら親とともに祖父母を支えていくことは、子どもにとっても大きな成長の機会となると言える。介護者は自身が高齢者を介護する姿を子どもに見せることは家族の成長の機会になる（興水，古田，流石，2019）と受け止めている。中高生の子どもにとって親が祖父母を介護する姿を間近で見たり、子ども自身が介護に加わり祖父母を支える経験を通して子ども達の進路選択に影響を与え成長の機会につながったと考えられる。

介護者である親はダブルケアの先に家族の成長を見据えることでダブルケアに取り組める（船渡，山口，2021）ことから、本研究において家族がダブルケア経験の先に、子どもの進路への良い影響や家

族として成長できると捉えるに至ったことは、ダブルケアのポジティブな側面として重要な要素であると言える。ダブルケアを肯定的に意味づけることは、家族がダブルケアを継続する原動力になるとともに、家族で介護をした経験が、その後の家族の強みとなると考えられる。

3. 思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする家族への看護援助の示唆

思春期は子どもの中学・高校の入学と卒業、その後の進路選択など、人生の方向性を形作る重要な時期である。この時期に親がダブルケアで多忙となると、子の情緒的な問題を十分にキャッチしたり相談に応じる余裕がなくなり、子どもに寄り添えなくなることによって【子どもの学校生活や進学が妨げられる】ことを引き起こしかねない。またダブルケアをする家族が支援と結びつく機会は、介護支援、乳幼児の子育て支援がある一方で、思春期の子育てとのダブルケアの大変さを家族が相談する場は少ない現状がある。思春期の子育てをする親達のネットワークは、保育園や幼稚園、小学校低学年のころよりも一般的に薄くなっており（黒沢，2015）、身近な人に子育ての悩みや介護との両立について相談できず、介護者が思いを抱え込むこともあり得る。さらに介護者である親が体調を崩す事で、介護役割を子どもが担わざるを得ない状況となり、子どもがヤングケアラーとなる可能性も潜んでいる。ダブルケアでは各家族の家族背景や、要介護者の介護度、子どもの発達段階により生じる課題は多様であり、支援の方向性も異なる。よって看護者は、ダブルケア当事者が子育てと介護の調整を図ることができているのか、子どもと関わる時間の確保や、子どもが学校生活に支障をきたしていないのかなど、多様な視点から家族をアセスメントすることが重要である。また家族で介護をした経験が、その後の家族の強みとなり、家族がダブルケアの体験を通して家族として成長する機会となるよう、家族に伴走し、家族とともに要介護者を支えていく姿勢が必要である。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする親を研究対象者に面接を行い、ダブルケア当事者である親が捉えた家族の体験を明らかにしたものである。そのため家族の体験は、研究対象者が認識しているものであり、他の家族が実際に認識した体験とは言えない。また本研究では要介護者の条件は限定しておらず、介護者との同居の有無や介護に至った経緯、介護期間等は異なっていた。ダブルケアでは要介護者との同居・別居等の居住環境や、介護に至った経緯、介護期間などの条件が影響すると思われるため、今後はより研究対象者の条件を考慮し検討する必要があると考える。

V. 結 論

思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験について、以下のことが明らかとなった。

1. 思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアをする家族の体験には、【家族それぞれが思いを抱え悩む】、ダブルケア当事者である親が多忙となり【家族の日常生活を維持することが困難となる】、【子どもが自身の思いを抱え込んだり反抗心を抱く】、【子どもの学校生活や進学が妨げられる】というネガティブな側面と同時に、家族が【互いに支え合い介護と日常生活を維持できるよう行動する】、【医療者や周りの人からの支援を受け安心感を抱く】ことや、【子どもが自身の世界を広げていく】というポジティブな側面があった。さらに思春期の子どもの子育てと老親介護のダブルケアでは、親が祖父母を介護する姿を間近で見たり、子どもが介護に加わり祖父母を支える経験をする事で【介護する経験を通して家族が成長する】ことが特徴である。
2. 思春期の子育てと老親介護のダブルケアをする家族への看護援助として、介護者への支援とともに、思春期の子どものおかれている状況や立場を理解し、家族全体を支援の対象と捉えた看護援助を

検討する必要がある。看護者には、家族がそれぞれの日常生活を維持しながら介護を継続できるように家族に伴走しつつ、家族とともに要介護者を支えていく姿勢が必要である。またダブルケアでは各家族により生じる課題は多様であり支援の方向性も異なっているため、看護者は多様な角度から家族の潜在する問題を捉え、ダブルケア経験を通して家族が成長する機会となるよう支援を検討していくことが必要である。

謝 辞

本研究のデータ収集にあたり、ご多忙中、快くご協力いただいた、ダブルケア支援団体、医療介護施設、研究参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反

本研究における開示すべき利益相反は存在しない。

各著者の貢献

第一著者は研究の着想と企画、データ収集、分析と解釈、論文執筆の全研究プロセスを担当した。第二著者はデータ分析と解釈、原稿への示唆、研究プロセス全体への助言を行なった。第三著者はデータ分析と解釈、原稿への示唆を行った。全ての著者は論文の最終稿を確認して投稿に同意した。

（受付 24.04.26）
（採用 24.10.15）

文 献

浅野いずみ：ダブルケアを担う家族介護者への支援に関する研究、目白大学総合科学研究、16：11-22, 2020
 船渡弘子、山口桂子：育児中の母親が親介護を担うダブルケア体験のプロセス、家族看護学研究、26（2）：89-104, 2021
 古田加代子、輿水めぐみ、流石ゆり子：女性主介護者からみた呼び寄せ介護の経験の特徴、日本在宅ケア学会誌、17（1）：59-67, 2013
 グレック美鈴、麻原きよみ、横山美江：よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートをめざして（第2版）、54-72, 医歯薬出版、東京、2016

平川仁尚、赤木勝幸、岩岡ひとみ、他：中学生の高齢者イメージに関する調査、ホスピスケアと在宅ケア、17（3）：254-257, 2009
 堀川尚子、赤井由紀子：ダブルケアに対する現状と課題—介護に対する思いを中心に—、日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション、49：3-6, 2019
 石川 丹：反抗期の子どもの心の理解と対応、楡の会発達研究センター報告、17, 2008
 輿水めぐみ、古田加代子、流石ゆり子：転居高齢者を支える主介護者の介護経験における構成概念、愛知県立大学看護学部紀要、25：57-64, 2019
 黒沢幸子：やさしい思春期臨床—子と親を活かすレッスン—：18-19, 金剛出版、東京、2015
 増田彰則、山中隆夫、武井美智子、他：家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について、心身医学、44（12）：903-909, 2004
 増谷順子、木村千里：就業女性のダブルケアのエスノグラフィ—認知症の親のケアと育児における困難と対処行動の様相、日本認知症ケア学会誌、20（2）：297-305, 2021
 McDaniel, S. H., Campbell, T. L., Hepworth, J. et al. / 松下明、家族志向のプライマリ・ケア：191-207, 丸善出版、東京、2012
 Meleis, A. I. / 片田範子訳：移行理論と看護 実践、研究、教育、学研メディカル秀潤社、東京、2019
 中山貴美子、藤内修二、北山秋雄：親子・友人関係が中学生の主観的健康度に及ぼす影響—思春期の子供を持つ親へのアプローチに向けて—、小児保健研究、56（1）：61-68, 1997
 小野田瑠璃、吉岡和子：中学生の家庭における居場所感と家族とのコミュニケーションの関連、福岡県立大学心理臨床研究、9：13-26, 2017
 澤田景子、伊東真理子：ダブルケア（育児と介護の同時進行）を行う者の経験世界の構造と支援課題に関する一考察、経済社会学会年報、40：129-140, 2018
 澤田景子：育児と介護を同時に担うダブルケア当事者への支援実践に関する検討—支援ニーズのグループインタビュー調査をととして—、経済社会学会年報、42：84-96, 2020
 相馬直子、山下順子：ダブルケア（ケアの複合化）、医療と社会、27（1）：63-75, 2017
 相馬直子、山下順子：ひとりでやらない育児・介護のダブルケア、ポプラ新書、東京、2020
 総務省：平成29年度情報通信白書、<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/index.htm>、2023年1月11日
 鈴木和子、渡辺裕子、佐藤律子：家族看護学 理論と実践（第5版）、日本看護協会出版会、東京、2019

Experiences of Families with the Double Responsibility of Caring for Their Older Parents and Adolescents —Through the Narratives of Double Carers—

Miki Sato¹⁾ Miyuki Nakayama²⁾ Atsuko Inoue²⁾

1) Osaka Saiseikai Nakatsu Hospital

2) Graduate School of Nursing, Osaka Metropolitan University

Key words: double-cared, adolescents, experiences of families

Purpose: This study aimed to clarify the experiences of families who double-cared for adolescents and older parents.

Methods: Semi-structured interviews were conducted with three mothers or fathers who had experience caring for older parents during the same period as adolescent child-rearing. The contents were transcribed verbatim and analyzed qualitatively and inductively.

Results: In total, nine categories were extracted. Both negative and positive aspects were generated. Negative aspects were extracted into four categories: “family members each had their own thoughts and worries,” “difficulty in maintaining the family’s daily life,” “children harbored their own feelings and had a rebellious spirit,” and “children’s school life and advancement were hindered.” Conversely, four categories were extracted from positive aspects: “acted to support each other and maintained care and daily life,” “felt a sense of security with support from medical staff and people around them,” “children expanded their own world,” and “family grew through the experience of caring.”

Conclusion: In nursing care for families who provide double care for adolescents and older parents, treating the whole family as the target of support is important. Furthermore, considering the potential problems for support from various angles according to the family’s situation, such as the child’s grade and career path, is also important.